

〈環境編〉



第1回「ジャパン SDGsアワード」受賞

発行日：2025年6月23日

発行：パルシステム東京 組織政策推進本部

Eco & Peace Navigator エコ & ピース ナビゲーター

6月7月は
環境キャンペーン 出来ることから少しづつ始めよう！

脱炭素社会をつくろう！

エネルギーを見直してみよう

ご家庭でも

うちエコ診断

ご自宅の電気やガスの使い過ぎをチェックしてみませんか。手軽派には簡易的なWEBサービス診断(5分～10分)。じっくり派には本格的な対面診断(約60分)の2種類。ご希望に合わせて選べます。



パルシステムでんき

食べものはもちろん、電気も産直！食べものと同じように顔が見える産直からの「パルシステムでんき」を利用して、原発や化石燃料に頼らない未来を実現させませんか。



産地でも

発電産地交流

「パルシステムでんき」発電産地WEB交流を開催しました。カタログの「までっこ鶏」でお馴染みの株式会社十文字チキンカンパニー(岩手県)と東北おひさま発電株式会社(山形県)の2社が参加。私たちが使っている電気は「どこから来て」、「誰が作っているのか」を知ることで脱炭素社会をつくる一歩が始まります。食べものと同じように電気も顔が見える関係は大切です。



活レボ：パルシステムでんきオンライン交流会▶

配送センターでも

環境配慮型

パルシステム東京では、宅配や福祉などいろいろな事業に取り組んでいます。エネルギーを含む資源の消費、ゴミやCO₂・排気ガス等の排出など、地球環境へ影響を与えることは否めません。事業の環境負荷を減らすため、太陽光発電機の設置、冷凍庫・冷蔵庫に於いてはオゾン層破壊係数ゼロ、温暖化係数の低いCO₂冷媒を採用した、ノンフロン冷凍機システムを使用し、設備の省エネやEVトラックの導入などにも取り組んでいます。



循環型社会をつくろう！

身近なところから発生抑制

容器を回収して

パルシステムでは「カタログ」、「びん」などのリユース・リサイクル対象品を回収しています。回収された資源から実はこんな商品も誕生しています。『こんせん72牛乳』の紙パックを再利用したいという組合員の声から「り・さいくりんぐ」が生まれました。開発当初は原料には向かないとされていた紙パックの再生紙。研究を重ねトイレットペーパーの商品化を実現しました。



マイボトルを利用して

環境省が発表している情報によると、マイボトルを一日1回、半年間(100回くらい)継続して使用することで、ペットボトルを1回利用するよりもCO₂排出量は8割減となり、削減効果が大きいとされています。※パルシステム東京がペットボトルを取り扱わない理由はCO₂排出量削減の他、マイクロプラスチックごみの発生を防ぐなどのためです。



※ペットボトル1回使用後のリサイクルでCO₂排出量は119g、ステンレスボトルは100回使用後廃棄(金属部分は埋め立て、プラスチック部分は焼却)でCO₂排出量は13.9gです。

出典：環境省「リユース可能な飲料容器及びマイカップ・マイボトルの利用に係る環境分析について▶

生ごみを肥料として

家庭の生ごみも実はコンポストを利用すれば、可燃ごみの減量や焼却時の負荷が軽減されるため、CO₂削減にもつながります。日本では昔から実践されてきたくらしの知恵であり、循環の輪をつくる大切な技術です。自然の生態系を再現して、植物が吸収しやすくなるように有機物を栄養に分解する仕組みです。コンポストで栄養を土に戻すと、植物の生育が良くなり、土の中だけでなく雨水が流れていく川や海の生態系全体を豊かにしたりすることができます。



出典：環境省「eco jin」LFCコンポスト▶

自然共生社会をつくろう！

くらしの中のエコを捜してみよう

くらしで実践

石けん

化学合成した界面活性剤を使っていないパルシステムの石けんはお肌に優しいだけではありません。保湿性の高い「地球の未来にまじめなボディソープ」の原料であるオリーブ油には、オリジナル商品「産地限定エキストラバージンオリーブオイル」と同じスペインの産直産地のものを使用しています。



間伐材まな板

森を守るには、木を伐ることも必要。日本の森は植林による人工林が多く、間伐など手を入れつけなければ、新しい命を育てることができないのです。



親子で学ぶ

石けん工場見学

昨年度は「松山油脂株式会社」を見学しました。パルシステムプラベートブランド(PB)のボディケア「ハーバル」シリーズやスキンケア「やさしいうるおい」シリーズ、「溶けくずれしにくい固形石けん」を取扱っています。環境に優しい商品はどのようにして、どんな工程で誰がつくっているのか、パルシステムのこだわりをじっくり学びました。



活レボ：石けんについて学ぼう▶

自然派行動

いなぎめぐみの里山

4月にはいなぎめぐみの里山で森林保全(急斜面のタケノコ掘り)を開催。元々は広葉樹が優占した里山。外来種の孟宗竹が繁殖した森林に、人の手を定期的に加え適度に間伐をして陽を入れ、生物多様性を保っています。参加組合員の協力があって生物多様性が保たれるのです。実際に参加することで、自然と共生する社会のあり方を実感してみませんか。



活レボ：いなぎめぐみの里山で森林保全▶

沖縄戦の記憶を 後世に伝えるために

80年前、戦場となった沖縄で何が起きたのか、
そしてその記憶を継承することの意味について、
第32軍司令官・牛島満中将の孫として、沖縄戦の実相を
探る活動を続けている牛島貞満氏にお話を聞きました。
戦争の悲劇を知ることは、未来へ平和をつなぐ第一歩となるはずです。



牛島 貞満 氏

第32軍（沖縄守備隊）の司令官だった牛島満中将の孫であり、沖縄戦の歴史を後世に伝える活動を続けています。

みなさんは、自分の生活している地域が戦場になることを考えたことがありますか？

今、この地球上では、ウクライナ、イスラエル・パレスチナのガザ地区などで毎日多くの戦争による死者が出ています。ドローンやミサイルによる空襲に怯え、学校で学ぶ機会も命までも、奪われてしまいます。80年前の沖縄戦を、遠い地域の遠い過去の自分とはかわりのない出来事として見ていませんか？

今年になって、沖縄のテレビや新聞は、80年前のその日に沖縄では何が起きたのかを伝える番組や記事を伝えています。新聞やテレビのニュースをあまり見なくなった若者たちも沖縄戦に触れる機会が増えています。また、学校では6月23日慰霊の日に向けた授業が行われます。

「国を守る」=「国民を守る」ではない

沖縄戦では、日本軍とアメリカ軍の資料や住民・日米の兵士の証言などをもとにした沖縄戦研究から次のようなことが分かっています。

- (1) 大本営（天皇を責任者とする戦争指導部）の沖縄戦の目的は、本土の防波堤、「本土決戦」の準備の時間稼ぎのための持久戦だった。日本軍の任務は、沖縄を守るためではなく、東京にあった大本営や国会・政府機関、天皇の住居などを長野県松代に移すことや米軍の関東上陸を阻止するための陣地づくりのための時間稼ぎだった。
- (2) 戦争体験者の証言では『鉄の暴風』が怖かったと言われる。米軍の戦艦の砲弾や空襲で落とされる爆弾の破片のことだ。壕（沖縄には多くの自然の洞窟があった）の外は、この砲弾の破片が四方八方から飛び、「鉄の暴風」が吹き荒れていた。
- (3) 米軍が沖縄島の読谷海岸に上陸し、首里までの間は軍隊同士の激しい戦闘が行われた。米軍は性能の良い兵器と物量で日本軍を圧倒し、日本軍は約3分の2の兵力を失った。米軍が首里に迫った5月22日、私の祖父である牛島満司令官は首里での戦闘継続でなく、司令部と部隊を首里から南部の摩文仁に移す作戦を決定した。この南部撤退は、決定一週間前に思いついた、ずさんで無謀な作戦であった。この結果、住民と日本軍、米軍の三者が混在する戦場が発生した。南部に移動する日本軍を追撃する米軍の「鉄の暴風」と地上部隊が襲いかかり、戦闘に巻き込まれた多くの住民が無残な死を遂げた。極限状態に陥った日本軍の兵士が住民を壕から追い出したり、殺害したりすることも起きた。日本軍は住民を守らなかった。
- (4) 戦争になると人は変わる。私の祖父牛島満は家族にも兵士にも沖縄の住民にも優しく接する人だった。しかし、多くの住民を犠牲にする作戦を決定した。住民を壕から追い出したり、住民から食料を奪ったりした日本軍の兵士も故郷に帰れば、よき父や兄だったに違いない。
- (5) 6月19日、牛島満司令官は、摩文仁の司令部から「司令官の命令で戦う組織的戦闘から、個々の兵隊が遊撃（ゲリラ）戦で、最後の一兵まで戦え」との命令を発した。その命令によって、沖縄の日本軍は8月15日が終わっても戦い続けることを強いられ、戦闘をやめることができたのは、9月7日であった。同司令官が、6月22日に自死したため停戦や武装解除を命令することができなくなった。日本軍の兵士は戦陣訓で「生きて虜囚の辱めを受けず」（投降を禁じていた）と教育されていた。
- (6) 80年前、沖縄の住民が身をもって紡ぎ出した教訓は、「国を守る」=「国民を守る」ではないこと、「軍隊は住民を守らない」であった。

よくこんなことを言う人がいます。「沖縄戦で多くの県民や兵士が亡くなった。その犠牲の上に今の日本の平和がある」。日本の総理大臣も毎年8月15日の日本政府主催の全国戦没者追悼式で「今日の我が国の平和と繁栄は、戦没者の皆様の尊い命と、苦難の歴史の上に築かれたものである」と言います。残念ながら、このようなあいまいな印象や記憶では、戦争を防ぐことはできません。日本人約310万人、東アジア・東南アジアの人々2000万人以上を死に追いやった戦争を決めた人、牛島満司令官のように住民や日本兵の死者が増える決定をした人の責任が問われないからです。その犠牲者や戦没者の中には中国や東南アジア、アメリカやイギリスに戦争を仕掛けた戦争指導者や現地軍の司令官が含まれているからです。戦争を防ぐには、なぜ戦争が起きたのか、どのような考え方で作戦を実施したのかを知らねばなりません。

こうしたことを知ることが、沖縄戦から学び、平和をつなげる力につながると思います。

みなさんもこの機会に80年前の戦争と向き合ってみませんか。



第32軍首里司令部壕跡

2019年10月に焼失した首里城正殿は、2026年秋には復興します。その地下15m～33mには、沖縄戦を指揮した第32軍首里司令部壕があります。沖縄県は司令部壕を保存・公開する検討委員会を開いて①調査済みの坑道の一部の戦争遺跡に指定②2026年秋に部分公開する計画の策定を行っています。南部撤退などの作戦を立案し、討議し、決定した場所



出典：第32軍司令部壕ウェブサイト
(https://32okinawa.com/)

© 沖縄県 知事公室 平和・地域外交推進課

です。皆さんも沖縄に行ったときに、復興した首里城と共に地下の司令部壕を見学してみてください。